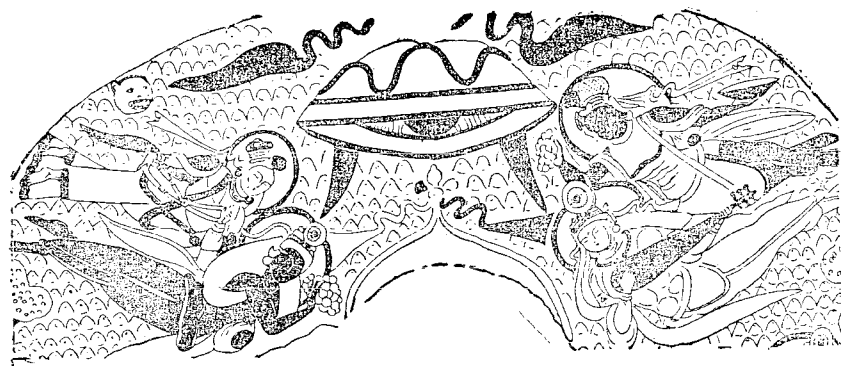


浪漫主義的國家學の史的発展 (五)

十河 佑貞

六、ギェルレスの國家學(一七九七年——一七九八年)

フリードリッヒ・シュレーゲルと違つてヨーゼフ・ギェルレス(Josef Görres)が青年時代に書いたものは、フランス革命の理念から一層鋭い影響を受けてゐる。其れも其の筈で、ギェルレスはラインランドの住民として、最もフランスに接近した所で革命を體驗したからである。殆ど二十年間のうちに、彼の狹隘なる故郷(Köln)は、政治上、最初はフランス共和國に合體し、後にはナポレオン帝國に歸服したのである。惜しいことには彼の革命熱の旺んであつた青年時代の著作は、今日あまり世間に知られてゐない。マリー・フォン・ギェルレス(Marie von Görres)が整理して出版した「政治篇」(Politische Schriften, München 1854)と5冊のは短篇を公にしたに過ぎない。しかしウキルヘルム・シヘルベルク(Wilhelm Schellberg)が編纂したものは、再び「赤色新聞」や「リュベツァール」から興越ある論文のシリーズを抜萃し



てゐるので、之に依てヤコピン黨的ギェルレスの特異な姿を辿ることが出来るのである。

註(1) Josef v. Görres, Ausgewählte Werke und Briefe, 2 Bände, Kempten, Verlag Kösel, 1911.

併てギェルレスの思想發展の徑路を考察するためには、先づ次の三つの著作から見てもかなければならない。即ち彼の理想を述べたものと見らるゝ「普及的平和」(Der allgemeine Frieden, 1798)と彼の十部作たる「赤色新聞」(Das Rote Blatt, 1798)及び其の後編刊として公にした「リュベツァール」(Der Rubezahl)といふ雑誌である。殊に後者の兩雑誌には、理論上の議論よりも實際上の議論の方が餘計に含まれてゐるとは云へ、極めて貴重な材料である。これらの雑誌によつて見るに、青年時代のギェルレスは「啓蒙思想」即ち、いはゆる「哲學的世紀」に心酔し、その結果、啓蒙主義的な政治原則を遵奉するに至つたと云ふ事は蓋し明白である。彼は偉大なる革命の理論家たるモンテスキューやルソーを充分に研究した。殊に彼はヤコピン黨派であるにも拘らず種々なる誇大の言説に迷はされず、常に事實の真相と參照した。人間の心を充分に知悉してゐると云つてもよい彼が、新事態に伴ふ暗影といふものを誤認すべき筈はないが、然し其れでも尙ほ敗徳に對して雄々しく闘へば其れに依て害惡を徐々にのぞくことが出来るものだと思つた。慥かに後になつて彼は、この最初の見解の謬まつてゐたことを悟つたのである。しかし此のことに就いては、彼の後期の著作を取扱ふ時に述べた方が當然だと思ふ。こゝでは主として彼が青年時代に書いたもの、中から最も重要な政治的原則を擇び出し、且つ叙述しなければならぬ。

ルソーと同じくギェルレスは熱心なる「人權」の擁護者である。「恐怖と人間の困窮」とに充たされた過去數千年の浪漫主義的國家學の史的発展 (十河佑貞)

後に、俄かに強大なる國民が出現すると云ふことが、吾等の時代まで保留されてあつた。その強大なる國民とは、しかし長い時代の桎梏に於て毫も認められなかつた人間の權利といふものを、其の暴奪者から之を奪ひ返し、さうして驚愕せるヨーロッパ人の眼前に示されたる其の獨特な光彩の裡に變形してゐるものである。」(Schubert I 54)

「自由！ 平等！ 博愛！ これらの言葉を次第に口にしないやうになつたかと思ふと、歡呼喝采の聲が起つた。自由・平等・博愛と云ふ言葉が、打ち碎かれたる然かし乍ら想像力に富める人民の魂に反響したのである。さうして、其處で美神グレイチエンの幸福なる日より此の方、地上から消滅してゐたと思はれる感情を呼び醒ましたのである。既に歴史上、人民が自由のために奮闘したことはあつた。しかし今や人民は、未だ歴史上、見なかつた程度に彼等自身を保護するために武装した。今までは唯だ歴史的見解のみが賦與されてゐたに過ぎない」(ibid.)

それならば如何にして此の「人間の權利」といふものが純真そのまゝに何處まで維持し得らるゝかを問題にするならば、ギェルレスは之に關して「予の信仰告白」(Mein Glaubensbekenntnis)と題する「赤色新聞」中の一論文に於て答解してゐる。但し此の論文は基督教的表象主義の方式によつた彼の最も重要な政治的原則を含めるものである。先づギェルレスは爰に啓蒙主義の最高學說たる「文化と人道とを理想とする人類不斷の進歩」と云ふことを認めてゐる。人類の無限的「完全」と云ふ理念そのものに就いては同時代にフリードリヒ・シレーゲルも亦た之を承認してゐる。⁽¹⁾

註(1) In seinem Aufsatz über Condorpet Minc II S. 50 ff.

とは云へ、この最晶目的に達するためには、どうしても立派な憲法が必要である。專制政體は勿論之に適當しな

いが、さりとて純粹の民主政治が適當だとも言へない。「予は民主政體の行はれる世紀は未だ現れず、而かも又た、さう速かに現れないであらう事を信ずるものである。」(ibid.)

ギェルレスは斯くの如く、カントと同様に、そしてフリードリヒ・シュレーゲルへの尖鋭なる對照に於て、直接にして純粹なる民主政治を排斥してゐる。彼は又た個人主義一點張りの理論的熱中家を排除すると同時に、民主主義の立場に無政府主義を置き換へた。「予は完全なる範圍に於ける無政府主義の時期すなはち其處では人々が何等の政體を有しない時代を信じてゐる。何となれば、有限的な時代と關係を絶つてゐるために彼等は何も求らないのである」(ibid. 37)これに依て吾々はフイヒテが「學者の本分に關する講演」に於て無政府主義の理想を述べてゐるのと

同様の立場を想起する。ギェルレスのユートピアの状態も正しくフイヒテのものと接近してゐると言はねばならぬ。

ギェルレスは斯く國家觀を消極的に區分したる後ちに、彼の積極的な信念を明らかに示してゐる。「予は代議制度が吾等の時代の文化に適合してゐると信ずる。而して予は又た、世界市民は、彼れに國家の享有權が存してゐる限り專制政體や或は急務への民主政體に於て採用したる國家の享有權そのものを拒絶すべき義務があると信ずる。」(ibid. 37)

一方に於てギェルレスは一七九五年に都督官政府の定めたる「現代のフランス憲法」の前途を祝福してゐる。とは云へ、特に地位の任命に關しては根本的改革の必要を認めてゐる。而して彼の同胞市民に官吏の行爲を充分に監督すること、彼等の過失を容赦なく「告發する」ことを強要してゐる。ギェルレス自身は、「赤色新聞」に於て官吏の收賄を無遠慮に擧發してゐる。彼曰く「あらゆる盜人とは永久に闘へ。德行の人を尊敬せよ」と。

他方また、刻下の變遷といふことに就て何等の暗示を呈してゐないギッルレスの青年期の著作に於て最も重要なことは、共和政治も亦た毫も理想境ではなくして、多數の過失や缺點を公表しなければならないと云ふ事を深刻に認めてゐることである。慥かに尙は彼は、人間の過失や缺點は「普遍的德義心と道德的教養との擴張によつて」之を禁止できるだらうと考へたが、しかし間もなく此の考へを訂正するに至つた。

フリードリッヒ・シュレーゲルが徹頭徹尾、宇宙主義者であり、さうして國民的感情のひらめきを全く有してゐないやうに、ギッルレスも亦た啓蒙主義と共和主義との結果を熟せしめ得るものは、唯だ普及的平和の状態であると確信した「サン・ピエール (St. Pierre) やルソーが建設したやうな永久平和、またカントが氣力のない經驗論者の息切れのする異論に對して掩護したやうな永久平和は………人類が絶えず其れに向て努力しなければならぬ理想である。何となれば其の理想に達して始めて人々は絶對の幸福を得られるからである。」(28)